

佐伯 四国霊場巡り

ノートとペンの同行二人

会員 佐 脇 貫 一

菜の花慕う蝶のようには、吹く春風にさそわれて、青麦畑の重道を、肩においずり管の笠、白衣にしみる旅の汗。巡礼すがたの老若が、打ちふる鈴は補陀落の、山路はるかに伝わりて、苦悩遠離を告げるよう。

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋癡 後身諸悪之所生 一切我今皆懺悔。巡礼遍路の旅の空、慈悲三体の御仏と、同行二人としるしては、山路の嶮も荒蕪も、この身を以てむもの良なし。南無大師遍照金剛、めぐる御寺も御堂前、懺悔の文を唱えては、現世の業にふしむしと、身と焼き、へくす思いあり。

いまさらには後世を願う疎略さをもたぬ身なれど、遍路の春を一幅の風景として、まぶたのうらに描き夜から佐伯四国八十八ヶ所をまわつて見たいと思いたつた。菜の花慕う蝶のようには、はじめの筆は染めてみたれど、いまは弥生の春でなく、夏も終りの残暑の九月、ノートとペンの同行二人、まず一番の札所からと、旧刹養賢寺を訪れた。

碧巖録換唱、江湖寧門道場と門札の出ている通用門をくぐると、庫裡の正面に、手入れの行届いた境内には思ひ出も古い種々の建物や墓碑、石仏、樹木、花卉。本堂前を出て、養賢禪寺の揚額を仰ぎ階段とあがれば、広い堂内はただ静寂、釈迦牟尼仏を中心と脇侍の御仏、慈眼

に威を湛え、金銅仏具のにぶい光がその中に解けこんでいる。

合掌礼拝して境内におり、観音堂に沿うて墓域にまわれば、黒木の門に続く幾十の石段、佐伯藩主毛利家の墓地である。その苔むした相は三百年の星霜をかたり、慶長十年藩祖元利高政が開基、香早院として妙心寺の三関和尚と招き第一祖住持とした歴史など、鼎山養賢寺の伝説は古い。裏山をふくめた墓域には、松下景陰、明石秋室、高妻芳洲など佐伯藩が誇る碩儒の墓碑がある。

堅く閉ざした御成門、経堂前にあつた菩提樹はいまいすこ、橋門秋月先生の碑の横に在り、六道能化の地藏尊、半跏趺坐の相は修羅の巻に散つた精霊と救済しようといふ登願か。

昭和二十年四月二十六日、午前五時四十分、ようやく朝の佐伯にかけた佐伯市民は、無気味に鳴りぬぐく空襲警報のサイレンに「またか」とは思つたが、手早く身のまわりを片付けて防空壕に退避した。ドンヨリと曇つた春の空、いつともならば静か一つも生まぬよう春景色だが、東南方の空から伝わつてくる異様な金属音を交えた爆音はB27が、市民を恐怖のルツボの中に入れた。轟と刻を秒針のような心臓の音、それはいよいよのなれ数分間であつた。突如、市内の各所でおこる爆撃、家は揺れ、地も震えた。佐伯中學校本館、馬場先下鉄砲所はずれ、西谷、白濁の各所に投下された爆弾は、無心の市民四十六名を爆殺した。とくに下鉄砲所は十枚連射馬場の土手に落ちた爆弾は、そこに揺られた防空壕を直撃し、一挙に二十数名の死者を出した。土手の松濤に引かかつていた犠牲者の手足、ふき飛びちぎれた肢体、この惨事で一家全滅した市民もあつたといふ、やがて取扱われた防空壕の跡に祀られた一軀の地藏尊、終戦後この

土地が佐伯電々公社用地となるに及んで、養賢寺境内の一隅に移された。

その昔養賢寺境外におつた水田は、いま埋立てられて向守の墓域となり、市道松崎線に沿う水田は多く住宅地帯となつた。明神川と上流は暗渠、排水路、下流は兩岸と埋立てて道路となり、往時のおもかげはしのぶよしもない。明神下の道は旧舊道、國水田独歩の作品「源おぢ」などに出てくる道路である。

蟹田から日豊線鉄路とこえて平野区に入るが、ここに二番札所空寿院がある。俗に筋神様とよまれ、伝説によると、藩祖毛利高政が城山築城のさい墨繩をひいた山伏空寿院と祀つた廟といふことになつてゐる。この祠堂はもと三光堂の跡に祭祥したもので、大正四年日豊線の敷設工事が行われたとき、松ヶ鼻の一畝、旧三光堂跡と思われる地点を掘りくずした折、一箇の納骨壺が出てきた。関係者の勞札に立つた怨霊は、養賢寺の隠寮でその生涯を終え、故郷恋しと伊豫の地の見える場所、蟹田の山に葬られ左山伏空寿院、崇りを恐れ人々は祠堂を建てて靈と祀り、空寿院と号したが、かつて夢塔があり、神経痛やリユウマキなど筋の痲痺に靈験あらたかといふので筋神様として信仰された。

さて空寿院の登口に近く一基の記念碑がある。「佐伯霊場創立記念碑」、四圍霊場八十八カ所にあやかつて、弘法大師信仰の人佐藤一斎が、大正六年十一月、佐伯四圍八十八カ所を創設した。その法縁を顕彰するため道路参拜の信仰者たちが建碑したものの。文は鶴谷佐藤蔵太郎書に松尾角藏である。創設者佐藤一斎は豊後竹田の人、若きころ佐伯に來り藤田俊結に師事して鍼灸の術を會得、これを生業としていたが、信仰心厚く幾度か四圍に渡り大師の靈跡を巡礼したといふ。

空寿院の本尊は何休陀如來、筋神様として信仰者が多いためか、祠堂は宏壯で、参拜者や遍路順礼者の宿泊ができるように施設されている。

これ所の位置はわだつたの、海辺に沿える箇所もあり霞たけ引く山々、高根の花を眺めつつ、わけ入る奥の里もあり、路の行手は空暗れて、柳は緑くれない、花の梢にうたう鳥、随縁法性の松風は、真如平等の浪のひびきと和して……

これは佐藤鶴谷の「佐伯霊場道遊」にある詠歌前書の一部、律儀な巡礼者でない風采坊は職路ととらず、空寿院と出ると佐伯駅前から海運橋、鶴谷から興人入口さ右折、女鳥地下へ、人家と人家にひさまつた露次の集山裾の一隅に小さな庵がある。三畝、女鳥の地藏庵、本尊は釈迦如來といふ。もとこの庵は山上におつたといわれ、大日寺の末寺だつた。それは大日寺の開基である秀乘大法師（律師）が、知友毛利高政を訪ねて佐伯に來り、地藏庵に住んでいたと伝えられるからで、秀乘大法師は高政の援助をうけて東光山大日寺を創建、毛利家の祈禱所として尊崇された。いま見る地藏庵はうら淋びて、庵主の僧は真言僧でなく、真宗の人である。

おきの洲のひろき渚の砂の面に
うへる大悲のかがぞ尊し
詠歌だけ他の寺庵のものより奔逸である。

女鳥の地下より南の河岸に、友れは、八、九十間ばかりの離れしがあり、これをわたりて、三所行けば東灘の屋敷。これが四番札所常光庵への通路だが、いまは漁船女けれ、女鳥橋から塩屋橋あるいは中川橋とすぎて幹線道路に出てバスと利用するがよい。屋敷野落の奥、難山裾に常光庵がある。本尊は大日如來、無住女れど都落の管理が行届いてゐる。附近に墓地があり、その奥所は小

筒がある。土輪塔の空輪と火輪を祀り、部落民は靈神とよび崇めてゐる。おそらく祖人の墓碑をまつたものであらう。

(住所) 佐伯市下堅田(津志河内)

研究

大嶋御番所修葺費

小引鯛網運上銀上納等について

—— 添村羽出浦にある庄屋文書 —— (七)

賛助会員 安部弥吉 衛門

鶴見町大嶋は鶴見半島の東西端にあり、当時の佐伯湾防備には無二の要地であるので、佐伯藩はここに御番所を置き、他の保戸嶋、小浦、蒲江各御番所と共に、領内治安の要衝としていたことは当然である。然るに享保十九年、大嶋御番所と修葺の際、その経費を佐伯湾内各浦浦住民の負担によつて支弁してゐる様である。(その負担は修葺費の全額か、又は一部であつたかは不明である。左記文書は、その修葺費の不足分を各浦々に割賦し、追加出銀方を浦々の庄屋に通知したものの様である。文中、石小船が、他に使い道もなき虫喰板を便所の座板の上葺にしたいからと、無出の世話を頼んでゐる。藩の金庫も貧しかつたのであらうか。尚書中の大嶋久次郎は大嶋の庄屋ではないかと思はれる。

(註) 文中「中浦」とあるは現今、鶴見町一四、「上浦」とあるは現今の上浦所から西上浦及代後海崎をどり、「嶋」は「地」とは

今、大入島一町と称えていた。

(第一資料)

大嶋御番所修復出銀増割

一、五匁六分

是は指引銭□銀神出不及

用 出 浦

右首大嶋御番所修復之義、今拾四日、取掛籠申候、何分古之追加銀不足仕候故、萬諸道具等買立難成候而半成、就仕候間、相社廻候上目録等差上可申候。右書面之追加銀其浦々御取立中浦上浦三ヶ所寄集放成此方へ御差越可致下候。中浦八日野浦庄屋殿方へ、嶋之地八日向泊り庄屋殿方へ、上浦八代後庄屋殿方へ、右三ヶ所に志所集め御取立可致下候。

一、其浦々古小船、むしくい板釘をなく、寸いたにも不成、採成し船御座候ハ、有無御申越可致下候。前以申入候通、雪古んの上ふきに仕度く、具合少々の銀出し買分ニ仕度頼存候。尤此狀留りお返し可致下候。

(享保十九年) 四月廿二日

大嶋

久 次 郎

右浦々

御 庄 屋 中 塚

(第二資料)

一、銀拾七匁六分

右首大嶋御番所置之表代此方、買下し違日し中候代銀之存ニ而五匁六分、指引被置候杯之様子ニ而御座候故、此御座候

享 四月廿三日

残テ

一、切銭 式匁四分

内 六 匁 小

中 越 分

用 出 浦
中 越 浦